

随想

近代を超えて

能力開発工学センター評議員 奥田健二



新しい内閣が発足した。これまでも新しい内閣の発足のたびに、美辞麗句を並べた政策スローガンを発表するのが恒例である。今回の安倍内閣の場合には「美しい国、日本」の実現を目標とすることを打ち出している。「美しい国」という言葉の根底に、一体どのような歴史観、思想、あるいは夢があるのか、今後の明確化の努力に待つほかない。

この点、筆者は、1980年に首相となった大平正芳氏(以下敬称略)の場合に、極めて明確な哲学、歴史観の表明が行われたことを思い出すのである。大平は最初の国会演説の冒頭で、今や時代は「近代化の時代から近代を超える時代に」移行したと彼自身の時代認識を明瞭に述べたのである。

大平は「近代を超える時代」を「文化の時代」と規定する。そして日本は明治以降、西欧化、近代化、工業化の道をひたむきに走り続け、今や高度経済成長国家の仲間の一員としての地位を確保するまでになったが、その反面、日本社会の優れた伝統を見失い、社会的連帯感は薄れ、地域の教育力は低下するにまかされるなど、多くの欠陥が露呈するに至ったと現状の把握を行い、このような欠陥を克服するためには、これまでの物質的・経済的豊かさの追求にとどまらず、さらに生活の質の向上、人間と自然との調和、人と人との心のふれあいを楽しめる環境の整備など、精神的・文化的豊かさを追求することに我々の努力の重点を移していかなければならないと論を進めるのである。

そして、この「近代を超える時代」に於いて文化的豊かさを享受するためには、日本は、これからの30年、50年、100年において、どのような途を目指すべきなのか、九つの政策研究会を発足させることとしたのである。この研究会には、若手官僚・民間人・学者など約200人が参加し、熱心な検討が進められた。しかし、極めて残念なことに、大平は1980年6月に急逝した。討議は引き続いて進められ、1980年8月から9月にかけて、『大平総理の政策研究会報告書』9冊が政府印刷局より出版されたのである。

研究会報告書それぞれの内容を紹介する余裕はないが、第一報告書『文化の時代』は、日本文化の特質の分析を行っており、欧米社会における「二者を峻別し対比する」思考法に対して、日本社会においては異質のもの矛盾するものをそのまま共生する状態を尊重する思考法を取るなどと分析している。この『文化の時代』報告書の要点は、筆者が前々から主張してきた「西欧社会の三分法思考に対する日本社会の相補性思考」という対比と通ずるものと言ってよいだろう。そして、相補性思考の下における組織の統合原理としては、上からの権力による集権的支配を好まず、活力ある部分システムを持つ「分数量型」構造が尊重されるなど、やや具体的に組織のあり方についても論を進めている。

これら政策研究の組織化推進を図った内閣審議官(当時)長富祐一郎は、このプロジェクトを回顧して、『近代を超えて』上下2冊にまとめ、出版した。大平氏に対する敬愛の念がにじみ出ている。筆者はこのようなプロジェクトが進められたことに誇りを感じている。♠